

# モンゴルにおける都市の形成発展と 市場経済化後の社会変動

石井祥子

## はじめに

モンゴル国では、1990年以降市場経済化が進行し、劇的な社会変動が生じている。これまでモンゴルの遊牧社会の社会変動に関してはさまざまな研究がなされてきたが、都市に関する本格的な研究は比較的少ない。筆者はすでに首都ウランバートルと遊牧社会の関係の変動について他稿で論じている<sup>1</sup>が、本稿では、モンゴルの首都ウランバートルの17世紀以後の形成発展の歴史と市場経済化後の都市生活の急激な変化と「消費経済」に焦点をあてて論ずる。

## 1 ウランバートルの形成・発展

現在のウランバートルは、チベット仏教のモンゴルにおける初代活仏の居住地として1639年に創設されたと言われている<sup>2</sup>。そこはイフ・フレー（モンゴル語で「大僧院」の意）と呼ばれ、約100年の間、20回以上も移動した後、1778年に定着化した<sup>3</sup>。この都市は活仏の宮殿伽藍を取り巻くように僧侶たちの集落があり、その周りを俗人や商人の街区が取り囲むという構造になっていて、1868年には1万人あまりの僧侶が居住していた<sup>4</sup>。

イフ・フレーは宗教都市として拡大したが、1758年には清朝より弁事大臣が駐在するようになり、ロシアと清との中継地としての戦略的重要性が認識されるようになってきたと同時に、漢人商人にとっても対ロシア貿易の中継地として注目されはじめた<sup>5</sup>。19世紀末の外モンゴルには、およそ500軒の中国人商店があり、10万人の中国人定住者がいたと言われる<sup>6</sup>。20世紀初頭、イフ・フレーには多くの中国人やロシア人の商人がいて、4500人の中国人職人、ほかに約40の大きな中

国の工場、25のロシアの工場があり、約100の小さな店や露店があった<sup>7</sup>(絵地図1)。

1911年の独立宣言の後には、ニースレル・フレー(首府の僧院)と改称され、モンゴルの首都となった<sup>8</sup>。モンゴルは1921年に独立を達成し当初は活仏による君主制が続いたが、1924年に活仏が死亡すると君主制が廃され、人民共和国が宣言された。その時、ソ連の指導によってウランバートル(モンゴル語で「赤い英雄」の意)と名づけられた<sup>9</sup>。



絵地図1 20世紀初頭のウランバートル

[出典: Улаанбаатар Хотын Атлас (国立地理院 1990 ウランバートル)]

独立時からウランバートルは発展し始めたが、大規模な都市化や拡大は1950年代になってからである。これは、第2次世界大戦後、国内全域に経済的・社会的変化が起こったこと、特に産業化・集団化を行ったことと関係がある<sup>10</sup>。

モンゴルの人口は、1950年代後半からの伸びが著しく、しかも増加のほとんどが都市に吸収されている。1956年と1984年を比べると、地方人口は66万2500人から88万2700人と22万人程度しか増えていないにもかかわらず、都市人口は18万3000人から93万7700人と75万人あまりも増えている<sup>11</sup>。

先にも触れたように、地方からウランバートルへの移住の最大の要因として、牧畜の集団化が挙げられる。1950年代初期には、牧畜がモンゴルのほとんどの人口の経済を支えていた。その牧畜はホト・アイル(2、3家族からなる宿営集団)単位の遊牧により成り立っていたのだが、モンゴルの指導者は、ホト・アイル単位による小規模な牧畜は中央的計画経済の原理に一致せず、近代化と両立できないと考えた。近代化と発展のためには、遊牧民をみな賃金労働者にすることが必要だとし、ソ連にならって農牧業の集団化をはかり、ネグデル(農牧業組合)や国営農場を設立し、計画経済が導入された。家畜の個人所有者には高い税をかけ、強制的に肉の供出を義務付け、反対にネグデルは極端に安い税と、優先的な借金が受けられるなどして、政策による圧力を加えた。その結果、1955年に地方人口の4分の3が遊牧家族だったのに対し、多くの牧民が家畜を処分して都市に移動



した結果、1950年代の終わりにはこの比率は3分の1に減少したのである<sup>12</sup>。

1960年には家畜の個人所有を規制し、1963年までに農牧業の集団化が完了した。このようなネグデルや国営農場の組織化、穀物農業の導入や、農牧業の近代化は、地方の労働力の需要を減少させた。また、病院・医療の近代化により、伝染病と幼児死亡率が減少したことも人口増加の要因のひとつとなった<sup>13</sup>。特に高率に上っていた性病の撲滅も人口増加を促した<sup>14</sup>。出生率増加・死亡率低下による急激な人口増加は、地方における人口過剰を生み出し、さらにウランバートルへと人口が集まる要因となった<sup>15</sup>。

こうしたウランバートルの人口増加に対応するため、住宅建設が進められたが、住宅供給は需要に追いつかなかった。その結果、都市の周辺地域に移動式家屋ゲルに居住する定住地区が形成された。

1970年代、ソ連からの援助により、モンゴル政府は工業化、都市の建設、鉱山開発に力を入れ、ウランバートルやその他の都市に大量に投資を始めた<sup>16</sup>。政府は地方から都市への移住をさらに奨励した。1989年の国勢調査によると、人口のおよそ60パーセントが都市部に住み、ウランバートルには国民の4分の1に当たる54万8400人の住民が住むようになった<sup>17</sup>。

ウランバートルは社会主義体制下において近代化し拡大した都市であるが、遊牧社会の中の都市という、モンゴルならではの特徴も兼ね備えていた。60年代までは高層の建築は少なく、都市といっても本来なら遊牧に用いる移動式家屋ゲルに住んでいる人がほとんどであった。ゲル定住地区には街路と住居区があり、区画整理された一定の敷地を板塀で囲み、その中にゲルを張って生活する様式である（写真1）。ゲル以外に木造家屋を併設する場合も多い。電気は敷設されてお

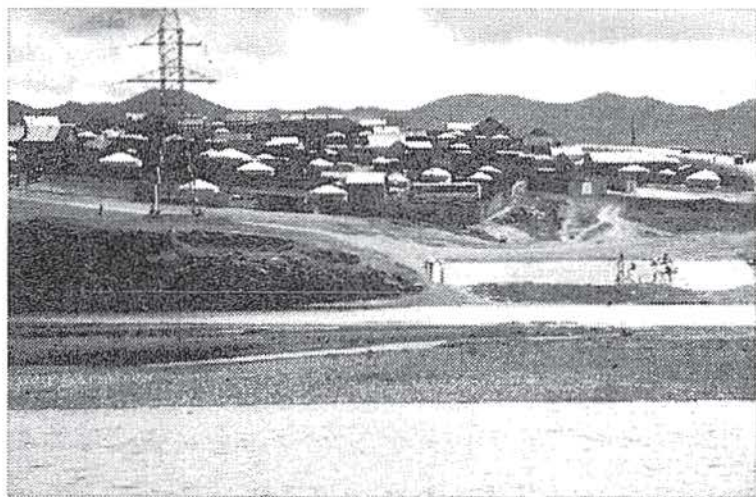


写真1：ウランバートル市郊外のゲル地区。郊外のゲル地区では、ウシやヒツジ、ヤギ、ウマなどの家畜を数頭飼養している家族もある。

り、電灯と電気製品の利用が各戸で可能だが、水道設備はなく、飲料水は共同の井戸から購入する。便所は敷地内に深い穴を掘り、その上に建てられる。ウランバートルでは60年代以降アパート建設に力が入れたが、人口の急増に追いつかなかったため、このようなゲル地区は今でもかなり存在する。ゲル生活の特徴は、板塀の中を家畜囲いとしても使えるため、近郊の草原と干草・人口飼料を利用して家畜を飼うことができることにある。したがって、都市住民でありながら、ゲル生活者の場合は、食糧のかなりの部分を自給することが可能である。一方、家畜を全く持たない都市住民もいて、彼らは店で肉や乳製品を買わなければならないが、彼らの中にも、親戚の遊牧民に食糧の一部を依存したり、契約によって直接遊牧民から肉やミルク・乳製品を得る人も少なくなかった。そこには、ウランバートル在住者の半数近くが地方出身者であったし、ほとんどは親戚に遊牧民がいるという背景がある。以上のような、都市生活者が食糧確保において遊牧社会にある程度依存するという関係は現在も依然として続いている。

社会主義時代のウランバートルの消費生活について、ウランバートル市公務員OYさん（1958年生まれの女性）は次のように語った。

「1960年代、ウランバートルで一番高い建物は国立デパートとその近くの4階建てのアパートだった。このアパートは政府の役人、医師、教師などの身分の高い人々が住み、人々はこのアパートを『貴族のアパート』と呼んでいた。他に大きな建物は少なく、ゲルばかりだった。ウランバートルでゲルに住んでいた人の中には、工場で働いている人もいたし、家畜を飼っている人もいた。商店もたくさんはなかった。60年代の買い物の支払い方法は2通りあった。工場で働いている人や医者、教師などは現金で物を買ひ、牧民はカシミヤなどと交換した。昔は市内が4つの地区に分けられていて、地区ごとに小さい食料品店があった。そこで、1日中並んで買い物をした。肉、牛乳などがなかなか手に入らなかった。そのため、家畜を持っていない人は、家畜を飼っている人と契約し、月に90Tgを前払いし牛乳1リットルをもらっていた。家畜を飼っている人は工場働く人よりも豊かで、車やオートバイを持っている人もいた。それに、店に並んで食料品を買う必要もなかった。70年代になると、店が増えてきた。工場もできてきて、貿易も発達してきた。ドイツ、チェコ、ポーランドから輸入品が入ってきた。都



市に入った輸入品を集めて、各店に配るセンターもできた。当時、首相などが買い物をする特別な店が2つあった。また、ロシアの技術者のための『ロシア店』があった。この店は首相など身分の高い人は入れるが、一般人は入れなかった。」

この聞き取りから、社会主義時代のウランバートルの近代化と都市化はめざましかったが、社会主義体制下では職種や業績によって若干の差異はあったものの、ほとんどの国民の収入は大差なく、ロシア人などの外国人や一部の特権階級を除くと、消費活動は極めて限定的であったことがわかる。

1990年代以後の市場経済化の初期には、ソ連の崩壊やコメコン体制の崩壊によってモンゴル経済は破綻状態であった。民営化された企業の多くは、かつて輸出先であったロシアやコメコン諸国への輸出が途絶え、倒産した。90年代前半は物資も不足し、国民の生活は困窮していた。しかし日本など先進諸国からの援助もあって、90年代後半は一定の安定を得ている。企業の倒産・失業などの問題はいまだ大きいですが、特にこの数年は消費経済が急激に活発化している。

## 2 ウランバートルの市場経済化後の変化

筆者はウランバートルでの生活や生計の変化と現状を知るために、第3・4地区と呼ばれる地区にあるモンゴルで最もにぎやかな商店街で調査を行った。第3・4地区はソ連の無償援助によって1970年代にアパート群が建てられたが、当時は現在のように多くの店が集中しているのではなく大きな国営の雑貨店、修理



写真2：現在の第3・4地区。新しい店が次々と開店し、平日、休日を問わず多くの買い物客でにぎわっている。

店などがあるだけであった。1990年代の民営化に伴って、それらの国営商店も民営化され、それがさらに転売、リースされ、さまざまな店が開店し現在のような

繁華街となった（写真2）。この第3・4地区で、商店街の地図を作成し、店主や店員に聞き取り調査を行なった。また補足的に量的データをとるために同時にアンケート調査<sup>18</sup>を行なった。調査は2002年の5月と8月、2003年の8月に実施した。

2002年の調査<sup>19</sup>についてここでは詳しく論じられないが、商店主や店員らからの聞き取りによれば、ウランバートルの中流家庭の生活では消費活動はしばしば収入を上回るほどであり、さまざまな形でインフォーマルな副収入を得ていることが多い。また、親戚の遊牧民に肉・乳製品を依存したり、家畜を遊牧民の親戚に預けたり、都市周辺部の定住のゲルに居住するゲル地区住民の場合は若干の家畜を飼って食糧を補うケースも多い。アンケート調査の結果では、ウランバートル出身者と地方出身者の家族の平均収入は、それぞれ161ドル、122ドル<sup>20</sup>と格差があり、ウランバートル出身の方が市場経済にうまく適応していることがわかる。

第3・4地区で開店している商店における聞き取り調査の結果、個人商店はすべて95年以降に開店したものであり、店主20代から40代までと若く、また高学歴の人が多くこともわかった。彼らは、市場経済化にいち早く適応し、収入を増やす手段が商売にあることに気づき、転職した人たちである。外国に自ら出かけて商品を仕入れてきてキオスクなどで売る、いわゆる「担ぎ屋」をやって資本金を蓄えた人も少なくない。ここ数年は消費が活発になっており、店の売り上げはまぐずまぐずだという。商店主の階層は経済的に上昇しつつある。都市における消費行動の変化、とくに記号的消費について一定の傾向を知るためのアンケートも実施したが、その結果、ウランバートルにおいては、おしゃれ着の購入時における選択基準に、「デザインのよさ」や「ブランド」を重視するという一定の記号的消費の傾向が明らかにみられることなどがわかった。一方地方では、「ブランド」は全く選択されていない。このように、ウランバートルは市場経済化の過渡期にあり、概して市民の生活は厳しいが、市場経済化の波に乗って成功してきた富裕層の購買力が上がり、消費は急激に活性化している。そうした傾向が市民全体にも広がりつつあり、近代的な「記号的消費」の要素も出現しているのである。

2003年8月にも第3・4地区の商店街で調査を行ったが、2003年には1年前に



も増して活気が感じられた。2002年に商店街の地図を作成したが、新しい店がいくつも開店し、再び地図を作り直さなければならなかった。韓国人経営の店も多くなり、日本の「100円ショップ」と同様の店も新たに開店していた。2003年では主に、この1年の変化と、現在のウランバートルでの生活についての聞き取り調査を行った。そのなかのいくつかを以下に紹介する。

#### <1975年生まれの女性、第3地区女性服店の店員>

「夫と子供1人の3人家族で、収入は月に180ドルだが生活は普通だと思う。支出で大きいものは衣服で、次が食料品である。肉と小麦、米を買う。地方に母に預けた家畜があるため、肉はもらったりする。7・8月になると母のいる地方へ遊びに行く。現在トルゴイというゲル地区に住んでいる。ゲルは小さいころから住み慣れているので、特に不便と感じたことはない。車も貯金もない。この1年間で、第3・4地区はCMの看板が増え、道路は補修され、街づくりがよくなってきたと思う。店が新しく開店して競争が激しく、商売が大変になった。市場経済というものがだんだんと理解できるようになり、店のサービスがよくなってきた。ファッションも流行が年々変わっていく。」

#### <1980年生まれの男性、第3地区で新聞販売のアルバイト>

「去年と比べても第3・4地区は変化した。新しい建物が次々と建った。しかし工事を急ぐあまり、安全性をおろそかにしている。この前もクレーン車が民家に倒れてきた事故があったりして、ここに住んでいる人は命の保証がない。しかし店が集中しているので、消費者にとってはいい所だ。ウランバートルの生活はお金さえあれば何でも買えるところである。しかし、犯罪が増え、夜も一人で歩くのは危険になってきた。うちはどろぼうにも入られたことがある。しかし、ウランバートルはこれからももっと発展していくことだろうと期待している。」

#### <1965年生まれの男性、第3地区食料品店店主>

「第3・4地区は道路の工事も終わり、街がきれいになってきた。新しい店がたくさん開店し、競争が激しくなった分、サービスがよくなってきた。ウランバートルの生活はとにかく物価が高くて、収入では生活に全く足りない。もともとは妻が店番をしていたのだが、子供が生まれたので育児をしている。代わりに自分

がここに立っているのだが、愛想良くしていなければならないし、男には難しい仕事だ。子供には大学までぜひ行かせたい。国に役立つ、立派な人間になってほしい。ウランバートルの将来はとてよくなっていくと思う。」

この他にも、第3・4地区の1年での変化とウランバートルの発展を語る人が多かった。貧富の差の拡大や犯罪の増加を心配する声も聞かれたが、それでも、ウランバートルはさらによくなっていくと期待を抱いている人が多かった。

### 3 土地の私有化法施行による今後のウランバートルの変化

モンゴル国では近年土地を国有から私有にする動きが具体化し、2003年の5月に「土地私有化法」が施行された。これによりウランバートル市の家族は一定の土地<sup>21</sup>を無料で支給されることになった。現在は作業の第一期としてゲル地区のみを対象に私有化作業が行われている。第3・4地区の隣にはガンダン寺というチベット仏教寺院があるのだが、その周りを取り囲むように存在するゲル地区でもまさに土地の私有化がおこなわれている最中であった。

ガンダン寺周辺のゲル地区は、ウランバートル市バヤンゴル区の16ホロという行政区に属している。16ホロには1600から2000世帯が居住しているという<sup>22</sup>。ホロ長秘書とホロの下位区分であるヘセグの長の案内で、10家族から聞き取りを得ることができた。ゲル地区とは前述の通り、区画整理された一定の敷地を板塀で囲み、その中にゲルや木造家屋を建てて生活している地区である。聞き取りを行った10家族のうち、2家族が中流から上流家庭で、5家族が中流、3家族がいわゆる「貧しい」家庭であった。中流から上流といわれる2家族の職業はそれぞれ、裁判所務めと元ネグデル長の家族であった。中流の家庭の職業は主に個人商売が多く、自分のゲルの敷地の一面に店を出しているというケースが3家族、ガンダン寺の僧侶が2家族であり、貧しい家庭は2家族が定年の年金生活者で、1家族はリストラで職を失った上に住んでいたアパートを友人の借金の形に取られてしまったという家族であった。10家族中6家族は民主化以後にガンダン寺のゲル地区に移ってきた人々で、その中でも2000年以降に移ってきたという家族は4家族



あった。ガンダン寺の案内をしてくれたヘセグ長もこのゲル地区に住んでいるのだが、特にガンダン寺の西門を出て第3・4地区へと通じる通りの移動は激しく、住民票を作ってもすぐに人が入れ替わってしまうという。

土地の無料配布を受けるウランバートルのゲル地区の対象世帯は6万世帯以上ある。しかし、実際に土地所有の申請を出しているのは数百世帯であるという。その理由はいくつか考えられるが、ガンダン寺のゲル地区での聞き取りの中では「全く知らない。聞いたこともない。土地をもらって私がどうするの。土地があってもなくても天国に行くのだから。」(90歳男性、ガンダン寺僧侶)のように、土地の所有法という法律自体を知らないという人や、「今のところ考えたことはない。もし土地をもらえなかったら、どこに行けばいいのかわからない。」(42歳女性、無職)のように私有化が始まったばかりでどうしていいかわからないという人、また、「私有化の書類はまだ作っていない。みんながどうするかを見てからにしようと思う。私有化するとだめじゃないのかな。個人のものになって税金を払うことになるで大変。ここを追い出されたらどこに行ったらいいか。」(63歳男性、年金生活者)のように、周りがどうするかを見定めて自分も行動を起こすという意見も聞かれた。しかし、聞き取りを行った10家族のうち、いち早く申請を提出したという元ネグデル長をはじめとして「土地の私有化には賛成している。土地を私有化してもらえてうれしい。自分の財産になると思うとうれしい。」と語った人は7人いた。土地私有化の政策には賛成しているが、まだよくわからないので様子を見ているという段階なのであろうと考えられる。

しかし、ガンダン寺の西門から第3・4地区に通じる通りに店や家を構える人々は状況が違うようである。ヘセグ長の話によると、その通りに住む家族はほとんどが土地所有の申請手続き書類を提出したという。この通りはそれほど広くはないが、西門からまっすぐ第3・4地区へと通じているため人の流れがあり、住宅地というよりも商売をするのに好都合な通りになっている。そのため、すでに何軒かの食堂や店の大きな建物が建っている。また、第4地区の大通りに面したゲル地区にも、たくさんの店が並び、立派な建物が建っている。

## おわりに

本稿では、ウランバートルの形成から現在までの都市の変遷と消費生活の変化の概要を論じた。市場経済化から10年あまりを経て、モンゴル市民はかつて経験したことの無い消費経済に直面している。また、土地の私有化が始まり、これから起ころうとしている大きな変化を前にしてとまどう人々の姿が印象的だった。市の中心部にあるガンダン寺の周辺のゲル地区では再開発が始まろうとしている。土地の私有化は、この後、高層集合住居（アパートはすでに私有化された）の住民を対象に実施されることになっている。それを見越して、郊外にたくさんの一軒屋が続々と建設され始めている。土地私有化は今後のモンゴルに大きな変動をもたらすことは間違いない。

遊牧社会については本稿では扱わなかったが、遊牧地域の行政中心地（定住村）でも土地の私有化が一部で始まりつつある。しかし遊牧システムと土地私有化はなじまないという考えが強く、私有化は今のところ極めて限定的な状態にとどまっている。

また、遊牧地域からウランバートルへの移住の流れが続いており、モンゴル郊外のゲル地区には、最近ウランバートルに出てきた遊牧民が住み着くようになった例が少なくない。今後は、こうした遊牧社会と都市の関係や人の移動などを含め、激動するウランバートルの状況をさらに見てゆきたい。

## <注釈>

- 1 (石井祥子2003b)
- 2 (バトバヤル2002 : 23)。ア・ロナ・タシによれば、現在の首都があるところには、1639年にはすでにイフ・フレという名の部落が存在していた。そこに、チベット仏教界においてはダライ・ラマ、パンチェン・ラマに次ぐ地位を占める蒙古黄帽派寺院の長であるジェプツンダンバ・ホトクトの邸宅があった。(ア・ロナ・タシ1966 : 27)
- 3 (Neupert, Ricardo & Sidney Goldstein 1994 : 33) ただし、Baabarによると、首都の定着化は1855年である。(Baabar1999 : 168)
- 4 (松川節1998 : 76-77)



- 5 (前掲書 : 69)
- 6 (バトバヤル2002 : 19)
- 7 (Baabar1999 : 168)
- 8 (ア・ロナ・タシ1966 : 27) (バトバヤル2002 : 23)
- 9 (バトバヤル2002 : 23)
- 10 (Neupert, Ricardo & Sidney Goldstein1994 : 24)
- 11 (渡辺聡1986 : 14)
- 12 (Neupert, Ricardo & Sidney Goldstein1994 : 14-15、20-25、34-36) (青木信治1993 : 116) (ラティモア1940 : 188-189)
- 13 (バトバヤル2002 : 101-102)
- 14 (ラティモア1940 : 171)
- 15 (Neupert, Ricardo & Sidney Goldstein 1994 : 14-15、20-25、34-36)
- 16 (松田忠徳1997a : 250)
- 17 (バトバヤル2002 : 103)
- 18 アンケートでは、出身地、性別、親の職業、家族成員数などを質問した上で、家族の収入と一ヶ月の生活費、および生活費の内訳について聞いた。また、現在欲しいもの、その理由、ウランバートルの生活についてどう思っているかについて自由回答を求め、98の回答を得た。
- 19 石井祥子2003aで詳しく論じている。
- 20 家計の収支が正確に把握されているわけではなく、収入や生活費の記述のない回答もあった。生活費の内訳についても同様である。数値自体がいずれも概算であり、内訳の合計が生活費総額と一致していない回答も多く、データの信頼性は高いとは言えないが、一定の傾向を知ることができる。平均は回答のあった数値を合計して、その項目毎の回答数で割って平均を出した。ちなみに、統計 (Mongolian Statistical Yearbook 2001) による2001年のモンゴル家庭の月収の平均は、111ドルであった。
- 21 2002年6月以前に結婚をした世帯は、ウランバートル市の場合0.07ヘクタールを無料で支給される。
- 22 この数は統計上の正確な数字ではなく、ホロ長秘書が教えてくれた数字による。ガンダン寺のゲル地区に限らず、ゲル地区には地方から移住してきて登録されていない世帯も住んでいる場合も多いという。

### <参考文献>

ア・ロナ・タシ

1966『蒙古の遊牧民をたずねて』佐藤清郎訳、秘境探検双書

石井祥子

2003a 「市場経済化後のウランバートルの現状と人々の生活」『平成12年度～平成14年度  
科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書「アジアの山地・森・草原における  
環境をめぐる地方の知と政策に関する人類学的研究」(研究代表者・稲村哲也)、123-  
161頁

2003b 「モンゴルにおける社会体制の変化と都市=遊牧社会の関係—『消費経済』に焦  
点を当てて」『比較人文学年報』第3号(名古屋大学大学院文学研究科)(印刷中)

石井祥子、渡辺道斉

2002 「馬とクリスチャン・ディオール—『消費』の視点から見たモンゴルの遊牧社会と  
都市」『比較文化研究』(名古屋経済大学比較文化研究会)第21号、9-26頁

バトバヤル

2002 『モンゴル現代史』芦村京、田中克彦訳、明石書店

松川 節

1998 『モンゴル歴史紀行』、河出書房新社

松田忠徳

1997 「計画経済から市場経済へ」小長谷有紀編『アジア読本—モンゴル』河出書房新社、  
248-256頁

ラティモア

1940 『農業支那と遊牧民族』後藤富男訳、生活社

渡辺 聡

1986 「モンゴルの社会主義農牧業」『モンゴル研究』(大阪外国語大学モンゴル研究会)  
第9号、2-16頁

Baabar

1999 *History of Mongolia*. D.Suhjargalmaa, S.Burenbayar, H.Hulan & N.  
Yuya (trans.) C.Kaplonski (ed.) University of Cambridge. The White  
Horse Press, Cambridge, UK.

National Statistical Office of Mongolia

2002 *Mongolian Statistical Yearbook 2001*. Ulaanbaatar, Mongolia

Neupert, Ricardo & Sidney Goldstein

1994 *Urbanization and Population Redistribution in Mongolia*. East-West  
Center, Honolulu, USA.